《論　文》

説明的な文章の読解に及ぼす読者の「文脈」および「観点」の影響について

舛　田　弘　子

要　約

「説明的な文章」の文章読解過程における，読者が作り上げた文脈（「読者の文脈」）をテーマとする。この「読者の文脈」の特徴，また「読者の文脈」の適切さに読者の主旨の理解や「観点」がどのように関連しているのか等を把握することを目的に，大学生を被験者として本研究は行われた。結果として，①4割の読者が意味段落の一部に言及せず，連接関係の1/2以上で記述のない読者は，意味段落を全て記述した者でも2割を占めた。また，文章の中核部を正しく読解した読者は1割弱であった。これらから，読者は文章の解釈や矛盾部分等をとばし，連接関係を曖昧にしたまま読解していることが示された。②意見文で主旨に言及したのは全体の6割に満たなかった。また要約文での「意味段落欠落なし群」の方が主旨に言及していた。また，不適切な「読者の文脈」を作成した読者は，意見文でも不適切な「観点」を示す傾向があった。これらから，主旨の把握や観点の偏り等と，適切な「読者の文脈」が関連することが示された。

キーワード：文章読解過程　「読者の文脈」　読者の「観点」

問題と目的

文章読解過程においては，読者による文脈の作成およびそれに基づく読解が重要であることを，筆者はこれまでの研究で論じてきた（舛田，2003他）(1)。この，「読者による文脈」とは，「文章の前後関係および全体像についての読者の理解」を指す。この「読者による文脈」は，当該の読者によって読解の行われている状況，文章の種類，文章内容に関連する（と想定される）当該の読者の知識・信念体系，後続の文や文章の理解を可能にする先行文（群）の理解，更に，「読者による文脈」それ自体などに影響を受けて生じると考えられる。「読者の文脈」は，文章読解の過程において，前後の語句や文章の意味や接続関係を理解（再理解）することに効力を持つ。

このように，読者が自身の文脈を作り上げ，それに基づいて読解することは，特に説明的な文章において，文章内容全体を適切に把握することが求められるタイプの読解を行うには不可欠であると考えられる。このタイプの読解としては，「試験や課題に答えるため」等の目的で

なされる読解（以下「説明文・課題読み」と記述）が挙げられる。他のタイプの読解，例えば「暇つぶし」に代表されるように，特に目的を持たずに読解する場合や，「特定の情報を探し出す」ことが目的の読解であるならば，読者の興味・関心に触れる部分や，求めている情報だけが読み取れれば良く，文章全体を適切に把握する必要はないし，前後関係を多少誤解しても特に問題はない場合も多いため，この「読者の文脈」を作る必要は必ずしもない。また，文学作品の読解においては，文章全体を満遍なく把握することよりも，特定の語句や部分に特にこだわって読むことが読解を深める可能性があり，また読者独自の鑑賞や解釈の幅が説明的な文章よりも広いために，説明的な文章の読解とは質的に異なると考えられる。これらの理由から，以下本論文では，「説明文・課題読み」を対象に議論を進めることとする。

さて，先に「読者の文脈」作成は，「説明文・課題読み」に不可欠だと述べたが，実際の大学生の読解から推測されるのは，「説明文・課題読み」の場合でも，「暇つぶし・特定の情報探し」の場合と同じように，文章内容を適切に反映した「読者の文脈」を作らず，自身の興味・関心に触れることや，特定の情報だけに着目した読解がなされているのではないかということである（舛田，2003他）。日常的な場面では，多くの人が，「斜め読み」とか「拾い読み」ということばに代表されるような，このタイプの読解を行っていると考えられるし，むしろこのタイプの読解の方が頻度が高い可能性もある。しかし，入念な思考をし，判断・意志決定するための材料として，文章を精読し，的確に把握することは，重要なスキルであり，また個人が使いこなせる読解タイプのバリエーションを増やす意味でも，大学教育の重要な目標の一つと考えられる。

ところで，「読者の文脈」作成の過程は，刻一刻と移り変わり，同時に様々な知識が活性化されることが想定される。従って，その時々でどのように「読者の文脈」が作られているかを適切に把握することは困難である。しかしながら，読解の際に作られる文脈を，先行文（群）から読者が抽出する，行為者，行為，行為の結果，その他の情報の関係というように考えれば，それら文章中のさまざまな情報がどのように読者によって関係づけられているか，即ち読者による文章構成の理解を把握することによって，「読者の文脈」を間接的に把握することは可能であると考えた。

そこで，文章中の情報間の関係づけを把握する方法として，文章の要約文を材料に，①読者が言及した情報，②情報間の連接関係を調べた。要約文を産出するには，読者は読解の結果得た情報を，自分なりに関連づけて再構成する必要があるため，上記①②の双方が把握できると考えた。この分析を通じて，「読者の文脈」の特徴を把握するとともに，それが当該の文章の特徴とどのように関わるかを理解することが本研究の第一の目的である。この第一の目的について結果を予想すると，読者は，対立的な情報が含まれるなどの複雑な文章である場合，文章内容を適切に反映した「読者の文脈」を作成できず，いくつかの内容や，連接関係を欠落させたより単純化された「読者の文脈」を作ると考えられる。

また，仮に適切な「読者の文脈」が作られない場合，その文章の主旨が正しく理解されない可能性があると考えた。加えて，読者は文章を読むときに，全く何も考えずにただ活字を追うと言うよりは，内容に関して自分なりの知識・経験，個人的な興味や関心などを外挿しながら読む，即ち，ある「観点」を持って読むことが想定される。その「観点」が，文章中の着目点などに影響を及ぼす可能性も同時に検証したいと考えた。そこで，③主旨の理解と，④読者の観点を把握するために，文章に対する意見文を用いることとした。意見文の内容から，読者が文章中のどの点について言及しつつ意見を展開しているかがわかるため，主旨を把握しているかどうかが間接的に把握できる。また読者がどのような内容の意見を展開しているのかから，読者の「観点」が把握できると考えた。これらを踏まえて，「読者の文脈」の適切さと，読者の主旨の理解や，「観点」がどのように関連しているのかを把握することが，本研究の第二の目的である。この第二の目的について結果を予想すると，読者が，文章全体及び主旨を正しく反映した「読者の文脈」を構成しているならば，意見文もまた，主旨や文章内容を適切にふまえたものになると考えられる。しかし，文章に部分的にしか着目せず，「読者の文脈」を構成しているとすれば，意見文も主旨を反映しないもの，また特定の文だけに反応したものになると考えられる。また，そのような特定の文への反応は，読者の「観点」と関連していると考えられる。

方　法

1）材 料 文

真田信治「方言は絶滅するのか」PHP 新書より，pp.172-175の「接客のマニュアル」と小見出しの付いた節を用いた。この文章の性質として，①第一の実験とその主な結果に加え，副次的な結果（主な結果とは反する内容）および，第二の実験とその結果（第一の実験の主な結果とは反する内容だが，副次的な結果とは対応する部分もある）という，一面的ではない構成になっていること，②解釈や説明，結論などが明示はされていないこと，③接続詞が用いられている部分と，ない部分があること，などが挙げられる。これらの性質によって，意味段落間の関係把握は必ずしも容易ではないため，読者自らの主体的な文脈作成活動が活性化されることが期待される。

また，この文章の主旨は，「ことばそれ自体の丁寧さの度合いと，聞き手に対する話し手の配慮の度合いが必ずしも対応しない場合があるため，ことばからだけでは配慮（敬意）を測定することができない。従って，今後，適切な配慮（敬意）の度合いの測定法を開発しなければならない。」というものである。これを把握するためには，上記①に示した２つの実験結果の記述を対比して正しく理解し，それと，第25文の「今後，ポライトネス（politeness）の観点から，形式からだけではない，本当の『丁寧さ』を測る方法を開発しなくてはならないと思う。」

を結びつけて解釈することが出来なければならない。

2）被験者と手続き

被験者は大学生58名。上記文章のコピーを配布し，文章の要約文（教示：添付した文章の要約を作成しなさい）および著者の主張への意見文（教示：著者の主張に対するあなたの意見を書きなさい）を作るよう指示して，１週間後に提出させた。

結果と考察

1）読者が言及した情報について

上述の手続きの結果，要約文と意見文の両方が利用可能なものは51対であったので，以後これらについて分析を行うこととした。

まず，材料文を構成する各文に番号を振り，意味段落という視点から，表１のように整理した。方法の部分で述べたように，２つの実験結果の記述を対比的に正しく理解するには，意味段落の１～４を第一の実験に関連したものとして，５～６を第二の実験に関連したものとしてそれぞれ把握する必要があり，また７を結論として押さえる必要がある。中でも，あえてこの文章の核となる部分を特定するならば，意味段落２～６がそれに当たる。

表１　文章の構成

１．調査方法などについて（１）
２．結果の整理法と主な結果の提示（２～12）
３．百貨店での指導やマニュアルの存在，マニュアルに忠実な現場の実態（13～15）
４．繰り返しの発話が２の結果と違うという事実の提示（16～17）
５．個人商店の場合の結果の提示（18）
６．敬語がなくても気配りを認められることが出来る，という解釈（19～24）
７．今後への提言（25）

＊カッコ内は材料文の文番号

次いで，要約文の内容を一文ずつ材料文と照会し，上記１～７の各意味段落が欠落なく言及されているかどうかについてチェックした。この際，意味段落の内容について，部分的にでも言及されていれば，「言及あり」とする基準を用いた。その結果は表２に示す。

ここから，全体の４割の読者は意味段落の一部に言及していないため，それらの意味段落を重要ではないと見なしている可能性がある。特に言及が欠落した意味段落は，７（９人，17.6％），３（８人，15.7％），５（７人，13.7％）であった。文章内容との関連で見ると，７は著者が結論となる主張を行っているところであり，要約文作成の定石から言って最も言及されるべき

部分であると考えられるが，それに反する結果となった。これは，この文章の性質②「結論が必ずしも明示的でないこと」と関連し，結論としてはっきり認識され難かったのではないかと考えられる。また，なぜ「…測る方法を開発しなければならない」と著者がまとめているのかが，唐突でわかりにくかった可能性も考えられる(2)。また，3は2の解釈部分であり，5は2の結果とは矛盾する内容だが，これらも着目されない傾向にあった。解釈や矛盾する内容の，その前後の部分の内容との関係づけが難しかったのかもしれない。

表2　要約文における意味段落の言及欠落箇所

意味段落欠落箇所	人　　数（%）	
欠落なし　　計	31(60.8)	
2だけが欠落	1(2.0)	
3　　〃	3(5.9)	
4　　〃	1(2.0)	
5　　〃	2(5.9)	
7　　〃	4(7.8)	
欠落1箇所		小計　11(21.6)
3，4が欠落	2(3.9)	
3，5　〃	1(2.0)	
3，7　〃	1(2.0)	
4，7　〃	1(2.0)	
6，7　〃	1(2.0)	
欠落2箇所		小計　6(10.2)
3，5，7が欠落	1(2.0)	
4，5，6　〃	1(2.0)	
5，6，7　〃	1(2.0)	
欠落3箇所		小計　3(5.9)
欠落あり　　計	20(39.2)	

2）連接関係について

連接関係は，1～7の各意味段落の間を結ぶ接続語句の機能を分析することによって把握した。ここで接続語句というのは，品詞としての接続詞，接続助詞のみならず，接続の機能を持つと考える語句（例：「今まで述べてきたように」「なぜそういうことが言えるかというと」など）や読点（例：…で「,」次に…）も含むものである。

この連接関係の機能については，永野（1986）の分類を参考に，以下の9カテゴリーに分類した。即ち，「展開」（前文の内容を受け，後の文で様々に展開する），「補足」（前文の内容を受け，後の文で説明・解釈を加える），「対比」（前文の内容に後の文の内容を対比・対立させる），「累加」（前文の内容に後文の内容を付け加えたり並列したりする），「反対」（前文の内容に反する内容を後文で述べる），「転換」（前文の話題を後文で変える），「同格」（前文と後文の内容が同等と見なされる），「統括」（全文の内容をまとめる），「その他」（分類不能），である。ただし，「統括」及び「その他」は永野の分類にはなく，筆者独自のものである。

さて，このカテゴリーに従って，課題文の連接関係を記述すると，以下のようになる。連接1（意味段落1と2をつなぐ）：「展開」，連接2（同2と3をつなぐ）：「補足」，連接3（同3と4）：「対比」，「累加」，「反対」の何れか，連接4（同4と5）：「累加」，「対比」の何れか，連接5（同5と6）：「反対」，連接6（同6と7）：「統括」である。連接3，4，5のように，複数の機能を認めている部分は，まとめ方や引用の仕方によってはそれらの何れも許容し得ると考えたためである。

上述の分類に従って，読者の記述した連接関係を整理したものを表3に記す。ここでは，全

ての箇所に言及した被験者31名についてのみ分析を行った[(3)]。最も欠落が多かったのは，連接６で64.5％，次いで連接２の58.1％，連接１の45.2％であった。これらは，材料文の文体，特に接続語句の使用が少ない影響があるのかも知れない。例えば７では，材料文は，「今後」で文章をはじめている。要約文もこれと同様，「今後」で文章が始まるものが多く，その前に「これらを踏まえて」，「このように」，「まとめると」などの統括の接続語句をおく読者は少なかった。同様に，連接２，連接１でも，接続語句は材料文自体で用いられていない。それに対して，連接３，４，５では，材料文中に「ところで」，「なお」，「しかし」と接続語句が用いられている。このことが，読者に連接関係をつかみやすくさせた一因であろうと思われる。

表３　要約文における連接関係の欠落の有無

欠　落　箇　所	人数（％）
欠落なし	0
連接１のみ欠落	3（ 9.7）
連接２　〃	2（ 6.5）
連接３　〃	1（ 3.2）
連接６　〃	4（12.9）
１箇所欠落　小計	11（35.5）
連接１，２が欠落	2（ 6.5）
連接１，４　〃	1（ 3.2）
連接１，６　〃	2（ 6.5）
連接２，６　〃	7（22.6）
連接３，６　〃	1（ 3.2）
２箇所欠落　小計	13（41.9）
連接１，２，４が欠落	1（ 3.2）
連接１，２，６　〃	2（ 6.5）
連接１，５，６　〃	1（ 3.2）
３箇所欠落　小計	4（12.9）
連接１，２，３，４が欠落	1（ 3.2）
連接２，３，４，６　〃	1（ 3.2）
連接１，２，３，４，６　〃	1（ 3.2）
４箇所以上欠落　小計	3（ 9.7）
計	31（100　）

そして，連接関係を３箇所以上明示していない読者は，要約各所の欠落がない被験者の２割を占めた。②で述べたような，要約文に意味段落各所の欠落がある読者と，連接関係の欠落が３箇所以上の欠落している読者を合わせると27人となり，全体の52.9％に上る。このことから，問題と目的の部分で述べたような，「拾い読み」，「斜め読み」型の読解を行っている可能性のある読者が，全体の半数程度に上ることが予想される。

３）意味段落および連接関係に見る，読者による文章構成

表４－１，２は，読者が文章をどのように再構成したか，言及された意味段落と連接関係の点から示したものである。ここから，以下のことが読み取れる。

まず，前述した，文章の中核となる意味段落２～６を，連接関係も含めてほぼ正しく読みとっていると言えるのは，８名（15.7％）の読者であった。それに対して，連接関係に２つ以上の欠落や誤りがあったり，意味段落自体を欠落させているものなどが合わせて31名（60.8％）ということから，やはり文章内容を正しく再構成できていない読者が大半だと言える。

次いで，意味段落の欠落がない場合（N＝31）に限ってみると，連接関係の欠落は186箇所（６箇所×31人）中62箇所（33.3％）であるのに対し，明らかに誤った連接関係を用いているのは，17箇所（9.1％）に過ぎなかった。また，読者全体（N＝51）で，意味段落に言及している部分に関し，２回以上連続して連接関係を欠落させている読者は，10名（19.6％）に上った。こ

表４－１　適切要約群による要約文の構成　N＝31

欠落・誤（人）		要　約　文　の　構　成	
連接欠落１　総数	10	１展開２補足３反対４累加５反対６〇〇７	３名
連接欠落１のみ	3	１〇〇２補足３反対４累加５反対６統括７	１名
連接欠落１＋誤１	6	１〇〇２補足３反対４累加５反対６展開７	１名
連接欠落１＋誤２	1	１展開２〇〇３反対４対比５反対６補足７	１名
		１〇〇２展開３反対４累加５反対６統括７	１名
		１展開２補足３展開４累加５反対６〇〇７	１名
		１展開２〇〇３展開４対比５反対６統括７	１名
		１展開２補足３〇〇４累加５同格６補足７	１名
連接欠落２　総数	14	１展開２〇〇３反対４累加５反対６〇〇７	２名
連接欠落２のみ	9	１展開２〇〇３累加４累加５反対６〇〇７	２名
連接欠落２＋誤１	3	１〇〇２補足３反対４累加５反対６〇〇７	２名
連接欠落２＋誤２	2	１展開２〇〇３対比４累加５反対６〇〇７	１名
		１〇〇２補足３累加４〇〇５反対６統括７	１名
		１展開２補足３〇〇４累加５反対６〇〇７	１名
		１展開２〇〇３展開４累加５反対６〇〇７	１名
		１展開２〇〇３展開４累加５反対６〇〇７	１名
		１展開２〇〇３転換４累加５反対６〇〇７	１名
		１〇〇２〇〇３反対４補足５反対６補足７	１名
		１〇〇２〇〇３転換４累加５反対６展開７	１名
連接欠落３以上　総数	7	１〇〇２〇〇３累加４累加５反対６〇〇７	２名
連接欠落のみ	4	１〇〇２〇〇３反対４〇〇５反対６補足７	１名
連接欠落＋誤１	3	１展開２〇〇３〇〇４〇〇５反対６〇〇７	１名
		１〇〇２展開３反対４累加５〇〇６〇〇７	１名
		１〇〇２〇〇３〇〇４〇〇５反対６〇〇７	１名
		１〇〇２〇〇３〇〇４〇〇５展開６統括７	１名

＊〇〇：連接関係，□：意味段落が欠落している箇所をそれぞれ示す。
網掛け部分：文章構成から見て不適切な連接関係であると思われるもの
囲み部分：特に重大な誤りであると思われるもの

こから，多くの読者は，連接関係を意識的には用いていないと推測できる。つまり，特に連接関係を明示せず，文章を続けていってしまっているのである。このことは，結局読者が材料文を正しく把握できず，自分なりの「読者の文脈」を作成できていないことの傍証ではないだろうか。

さらに，連接関係の誤りを詳細に見ると，先に述べた，意味段落の欠落がない場合（N＝31）の誤り17箇所のうち，連接２（「補足」）を「展開」としたのが２箇所，連接３（「対比」，「累加」，「反対」の何れか）を「展開」としたのが４箇所，「転換」としたのが２箇所，連接４（「累加」，「対比」の何れか）を「補足」としたのが１箇所，連接５（「反対」）を「同格」，「展開」としたのが各１箇所，連接６（「統括」）を「補足」としたのが４箇所，「展開」としたのが２箇所であった。結局，「展開」とする誤りが最も多く，９箇所（誤り中52.9％）となっている。こ

表４－２　不適切要約群による要約文の構成　N＝20

欠落・誤（人）		要　約　文　の　構　成	
意味段落欠落１　総数	11	１展開２補足３反対４累加５反対６○○□	１名
意味段落欠落に伴う連接欠落のみ	１	１○○２○○□反対４累加５反対６○○７	２名
連接欠落（誤なし）	５	１○○□展開３○○４○○５反対６補足７	１名
連接欠落＋誤	５	１○○２○○３○○□補足５反対６統括７	１名
		１展開２補足３累加４○○５○○６○○□	１名
		１○○２展開３反対４反対５展開６○○□	１名
		１○○２○○□展開４対比５○○６○○７	１名
		１○○２○○３○○４○○５反対６○○□	１名
		１○○２対比３○○４○○□○○６○○７	１名
		１○○２○○３○○４○○□○○６○○７	１名
意味段落欠落２　総数	６	１展開２○○□反対４累加５反対６○○□	１名
意味段落欠落に伴う連接欠落のみ	１	１展開２○○３○○□対比５反対６○○□	１名
連接欠落（誤なし）	４	１同格２補足３反対４反対５○○□○○□	１名
連接欠落＋誤	１	１展開２○○□○○□対比５反対６○○７	１名
		１展開２○○□反対４○○□反対６○○７	１名
		１展開２○○□○○□○○５反対６○○７	１名
意味段落欠落３　総数	３	１展開２○○□反対４○○□○○６○○□	１名
連接欠落（誤なし）	２	１○○２統括３○○□○○□○○□○○７	１名
連接欠落＋誤	１	１○○２○○３○○４○○□○○□○○□	１名

＊○○：連接関係，□：意味段落が欠落している箇所をそれぞれ示す。
網掛け部分：文章構成から見て不適切な連接関係であると思われるもの
囲み部分：特に重大な誤りであると思われるもの

こから，意味段落間の関係がよく理解できない場合，とりあえず「展開」を選択している可能性が見て取れる。

４）意見文の内容の検討

意見文は，その内容を全部で12のカテゴリーに分類した。即ち，ａ）主旨（材料文第25行）に対して直接何らかの言及があるもの，ｂ）「敬意は真心がこもっていることが一番大事だ」とするもの，ｃ）意味段落５および材料文第24行（「しかし，そこには相手に対する配慮，気配りを十分に認めることができよう。」）に対し，「敬語はないが気配りを感じる」とするもの，ｄ）百貨店・個人商店は，店の性質や目的に合ったことばづかいをしているのだとするもの，ｅ）意味段落２～５に対し，「敬語を使ったからといって必ずしも丁寧とは言えない」とするもの，ｆ）関西弁の特殊性について言及したもの，ｇ）マニュアルに従った行動を良くないとするもの，ｈ）材料文第24行に対し，「自分には気配りは認められない」とするもの，ｉ）自分の経験を述べたもの，ｊ）意味段落３に反対あるいは意味段落６に賛成し，「です・ますでも自分は失礼とは感じない」とするもの，ｋ）敬語の種類などについてコメントしたもの，ｌ）その他，であった（資料１）。これを，読者の「観点」とし，以後の分析を進める。

表５　意見文に示された各意見の分類結果

意　見　分　類	全　　体 （N＝51）	適切要約群 （N＝31）	不適切要約群 （N＝20）
a　主旨へのコメント	30(58.8)	23(74.2)	7(35.0)
b　真心一番	21(41.2)	13(41.9)	8(40.0)
c　敬語ないが気配りある	18(35.3)	14(45.2)	4(20.0)
d　店の性質・目的に対応	17(33.3)	12(38.7)	5(25.0)
e　敬語≠丁寧	13(25.5)	10(32.3)	3(15.0)
f　関西弁の特殊性	9(17.6)	5(16.1)	4(20.0)
g　マニュアル＝悪	7(13.7)	5(16.1)	2(10.0)
h　気配り認められない	7(13.7)	3(9.7)	4(20.0)
i　自分の経験	6(11.8)	3(9.7)	3(15.0)
j　です・ます失礼でない	5(9.8)	2(6.5)	3(15.0)
k　敬語の種類	2(3.9)	1(3.2)	1(5.0)
l　その他	4(7.8)	1(3.2)	3(15.0)

数字は人数，（　）は％，複数選択の結果。

まず，「主旨の理解」を，「材料文第25行に言及していること」とし，その結果を示したのが表３である。すると，主旨へ何らかの言及をしたのは全体の６割に満たず，残りの４割強は，別の所に言及する形で意見文を作成したことがわかる。

次いで，「『読者の文脈』の適切さと『観点』との関係」であるが，『読者の文脈』の適切さを「材料文の７意味段落全てに言及した要約文を作成していること」として，表２に従い，適切文脈群（N＝31）と，不適切文脈群群（N＝20）に分けて，それぞれどのような「観点」との関連があるかを見た（表５）。すると，a）主旨へのコメント，およびc）意味段落５に対し，「敬語はないが気配りを感じる」とするものに関しては，適切文脈群の方がより高い比率を示した。このことから，今回の読者たちは，国語の試験問題への解答法としてよく言われる，「主旨は文章の最後の部分に探せ」というストラテジーを単純に取っているのでは必ずしもないようである。むしろ，全体を適切に把握できて初めて，最後の主旨に当たる部分を発見，理解できると言うことではないだろうか。

更に，読者の読解上の問題点をより詳細に検討するため，全７意味段落中２つ以上を欠いて文脈を作成した群（N＝９）の「観点」を見た。特に比率が高かったのが，b）敬意は真心がこもっていることが一番大事だとするもの（９人中７人，77.7％），また比較的比率が高めであったのが，j）「です・ますでも自分は失礼とは感じない」とするもの（９人中３人，33.3％）であった。これらの読者たちは，百貨店での調査結果の部分（意味段落１～２），および「です・ますはないが気配りを十分認めることが出来る」（意味段落６）は読めているものの，その他の部分の読みが曖昧であったことが考えられる。そのような読み方と，「ことばよりも真心が大事」というようなステレオタイプな「観点」が関連しているのではないだろうか。

それに対し，意味段落の欠落がなく，連接関係の欠落も１以内の読者，即ち最も適切な要約文を作成した読者（N＝10）の結果で特徴的なのは，ｇ）マニュアルに従った行動を良くないとするもの，ｉ）自分の経験を述べたもの，ｊ）「です・ますでも自分は失礼とは感じない」とするもの，がそれぞれ０人であったことと，ｃ）「敬語はないが気配りを感じる」とするものが，比較的比率が高めであったこと（10人中５人，50％）である。このうち，ｇ）およびｊ）は，文章内容から派生した内容ではあるものの，直接の関係はない。従って，これらの読者は，そのような派生的な「観点」を持っていない可能性がある。

最後に，最も適切な意見文のあり方として，ａ）およびｄ）の観点が含まれている意見文を見たところ，そのような意見文は全部で９あったが，それは全て適切要約群によって産出されたものであった。連接関係はこれにはあまり影響を及ぼしていなかった。

討　　論

１）結果のまとめと予想の検証

今まで得られた結果をまとめ，予想はどの程度妥当なものであったかを検証する。まず，第一の目的に関連した予想は，「読者は，対立的な情報が含まれるなどの複雑な文章である場合，文章内容が適切に反映された『読者の文脈』を作成できず，いくつかの内容や，連接関係を欠落させた，より単純化された『読者の文脈』を作ると考えられる。」であった。

これに関し，まず意味段落の記述については，全体の４割の読者が，意味段落の一部に言及していない。特に，著者が結論となる主張を行っている意味段落７，意味段落２の解釈部分である意味段落３，意味段落２の結果と矛盾する内容である意味段落５が言及されない傾向にあった。そして，連接関係については，最も連接関係の欠落が多かったのは，材料文でも接続語句を用いていない，連接６，連接２，連接１であった。また，連接関係を３箇所以上明示していない読者は，要約各所の欠落がない人たちの中の２割を占め，意味段落欠落者と合わせると，「拾い読み」，「斜め読み」型の読解を行っている可能性のある読者が，全体の半数程度に上ることが示唆された。さらに，読者による文章の再構成については，文章の中核となる部分を正しく再構成した読者は１割弱であるのに対し，６割の読者はそれができていなかった。また，連接関係の欠落が，その誤りと比べて多いことから，読者は連接関係を意識的には用いていないと推測できる。さらに，連接関係の誤りには，「展開」とするものが最も多いことから，とりあえず「展開」を選択している可能性が示唆された。

これらの結果から，読者は，解釈や矛盾部分などをとばし，連接関係を曖昧にしていることが示され，この予想は確かめられたと言える。

次に，第二の目的に関する予想は，「読者が，文章全体及び主旨を正しく反映した『読者の文脈』を構成しているならば，意見文もまた，主旨や文章内容を適切にふまえたものになると

考えられる。しかし，文章に部分的にしか着目せず，「読者の文脈」を構成しているとすれば，意見文も主旨を反映しないもの，また特定の文だけに反応したものになると考えられる。また，そのような特定の文への反応は，読者の『観点』と関連していると考えられる。」というものであった。

これに関連した結果として，「主旨の理解」では，主旨へ何らかの言及をしたのは全体の6割に満たず，残りの4割強は別の所に言及して意見文を作成していた。「『読者の文脈』の適切さと『観点』との関係」では，適切文脈群と，不適切文脈群で，それぞれどのような「観点」との関連があるかを見たところ，主旨に関しては，全体を把握した適切文脈群の方がよりよく記述していた。また，最も不適切な『読者の文脈』を作成した読者と，最も適切な『読者の文脈』を作成した読者の「観点」を比較すると，前者では，ステレオタイプな「観点」を持っている傾向があるのに対し，後者では，文章内容に直接関連しない，派生的な「観点」は持っていない傾向が示された。さらに，最も適切な意見文は，全て適切文脈群によって産出されたものであった。これらから，主旨の把握の点，観点の偏りの点等と，適切な「読者の文脈」との関連があることが示され，この予想も確認されたと言える。

2）今後の課題

本研究は，「読者の文脈」および「観点」の適切さや問題点を，読者が産出した要約文や意見文から理解しようとする試みであった。前項で述べたように，研究上の予想はおおむね妥当であると確認されたが，特に方法論上で，いくつかの問題点が残されている。

まず第一に，「読者の文脈」を理解するために，今回採った「要約文産出法」の問題があげられる。読解と文章作成には異なった能力が必要とされる。従って，読者が読解中に作成しているであろう文脈は，当然ながら，産出された要約文と等しいものではない。しかしながら，要約文が適切に産出できることが，主旨の理解等に関わっていることが示されたため，要約文はある程度の妥当性を持つ指標と言えることもわかった。従って，今後は，読者による文章を利用する場合，要約文の分析に加え，文章内容に関連した発問を併用するなどして，「読者の文脈」や，「読者の理解した文章内容」を把握することがより適当な方法であろうと思われる。

第二に，文章記述以外の可能性として，口頭による回答方法を検討する必要があげられる。口頭による回答をさせることで，文章作成が不得手な被験者でも，意図をより容易に伝えることができるだろうし，実験者側でも，被験者側の意図をより明確に確認することができるという利点がある。文章理解の過程や思考過程を口頭で把握する研究では，たとえば「プロトコル分析法」がよく知られている。これは，刻一刻移り変わる思考をその都度報告して貰うという点では優れた方法であるが，被験者がこの方法に習熟し，また課題状況に分析的な視点を有していることも求められるといった難点がある。また，言語報告自体が心的過程に影響を与える，言語報告は当該の心的過程には副次的なものであるなど，言語報告それ自体にも様々な問題点

があることが知られている（海保／原田1993）。これとは別に，「半構造化された面接法」では，被験者の回答の状況に合わせて，質問を変化させつつ，必要な情報を引き出していくことができるのではないかと考えられる。

今後は，これらの方法を様々に検討し，より適当な方法を探索する必要がある。

註（1）特に断らない場合，以下での「文章」とは，日本語の文章を指すものとする。

（2）特に「測定法を開発」の部分は，この前後の節には言及がないために，筆者自身にも，なぜ著者がこのような表現をしているのかが不明確である。推測するに，著者は社会言語学者であるため，形式的に分類される敬語の丁寧度と，敬語を用いない場合の発話の丁寧度を測定し分ける方法が大きな関心事であるためだと思われる。

（3）要約の内容自体に欠落がある場合，各意味段落間の連接関係に焦点化したこの分類法には馴染まないためである。

参考文献

1．市川真一（編）1996　「認知心理学４　思考」東京大学出版会
2．海保博之／原田悦子（編）1993「プロトコル分析入門　発話データから何を読むか」新曜社
3．舛田弘子　2003　課題文の読解過程における読者の観点および読解の特徴と読解上の問題点について　札幌学院大学人文学会紀要　第74号　pp.41-54
4．永野賢　1986　「文章論総説」　朝倉書店
5．高野陽太郎・岡隆（編）2004　「心理学研究法　心を見つめる科学のまなざし」有斐閣
6．吉村浩一　1998　「心のことば　心理学の言語・会話データ」培風館

資料１　分類された意見文の例（部分）

a	主旨へのコメント：	我々は，筆者が最後に述べているように，言葉そのものの形式だけでなく，状況，人間関係などによって，その表現形式がふさわしいか考えるべきだと思う。だが，それは時に相手の心境をも考慮する必要があるなど，第三者からではわからないものもあり，筆者の言う本当の「丁寧さ」を測る方法を開発するのは，かなり難しいのではないだろうか。
b	真心一番：	このときに心がこもっているかどうかはわからないが，あまりにマニュアルに頼るのはダメである。何にしろ待遇表現は，心のこもっていることが重要である。
c	敬語ないが気配りある：	しかし，筆者が言うように，たとえ丁寧な言葉が使われていなくても，その言葉からは客に対する思いやりや優しい気持ちが見える。
d	店の性質・目的に対応：	私のイメージでは百貨店は「上品」「エレガント」などと言った，少し一般市民よりも生活水準の高い人を目的としたお店なので，丁寧語や謙譲を用いて，粗相のないように接したのではないかと思いました。逆に個人商店といったお店は，一般市民を目的としてると思うので，丁寧語や謙譲語ではなく，日常会話のように接してもらった方が「親しみやすい」という考えから，３分の１はくだけた接客になっているのだと思いました。
e	敬語≠丁寧：	だから，僕は，丁（寧語）や謙（譲語）だけで，相手側に対する本当の意味での配慮はできないと思います。自分の言葉で相手への配慮の気持ちを持てば，丁や謙でなくても十分なコミュニケーションを取ることができると思います。
f	関西弁の特殊性：	確かに関西圏に存在する個人商店の回答は，丁寧語「です」「ます」体のない形にもかかわらず，失礼な印象を感じなかった。その理由は，回答が関西弁だからだと思う。関西弁には物腰を柔らかくする力があるのではないだろうか。
g	マニュアル＝悪：	百貨店で使用されているような敬語はマニュアルに乗っ取って使用しているために，聞き返された場合に対応できないなど，とても表面的なものであると思った。
h	気配り認められない：	『いつもは七時なんやけどね，うちね，今日たぶん，ぼく早く帰りたいから，六時半頃に閉めたいんやわ』この表現から相手に対する配慮，気配りが充分に認めることができようーと筆者は言うが，ことばの説明が多いと，それは相手に対して“十分な”気配りと言えるのだろうか。一言の『お客さんが来るまで開けときます』の方が十分配慮・気配りが感じられる。
i	自分の経験：	自分も今アルバイトで接客業をしていますが，言葉の使い方は大変重要であり，最も気を遣う点です。それは言葉１つでお客様に与える印象ががらりと変わってしまうからで，実験の結果にもあるように「です」「ます」体は，自分のバイト先のマニュアルでも使ってはいけないことになっています。
j	です・ます失礼でない：	自分的には「です」「ます」の表現を使っても違和感を感じることはないと思います。確かに，「～でございます」はよい表現だとは思いますが，「です」「ます」の表現も悪くないと思います。
k	敬語の種類：	日常生活の受け答えではないので，「でございます」以上の丁寧さは必要である。しかし，相手への配慮として，「～いたします」や「～させて頂く」となると，聞き取りずらく回りくどい言い方になってしまうのではないだろうか。丁寧語として一番整った表現を使用すべきで，それ以上尊敬語や丁寧語を付け加える必要はないと思う。
l	その他：	このような調査はとても勉強になり，おもしろいと思う。

How reader contextualization and reader standpoint affect the reading of “explanatory” texts

MASUDA Hiroko

This study examines how readers comprehend “explanatory texts”(reader contextualization). The study aims to understand the characteristics of reader contextualization, and how such contextualization is affected by the reader’s understanding of the main point and the reader’s standpoint. Subjects were university students (N=53), who were given the task of reading an “explanatory text” for which they were to write a summary and to comment on the author’s ideas.

The main results are as follows:

1) 40% of the subjects did not summarize any of the “idea units” in the text. Of the subjects who summarized all of the “idea units,” 20% commented on fewer than half of the relationships between paragraphs. Almost 10% of subjects did not understand the core content of the text. This suggests that the subjects only vaguely comprehended the text, and did not understand explanations given by the author, or contradictions unconsciously left by the author.

2) Fewer than 60% of the subjects commented on the main point of the text. Subjects who did comment on “idea units” tended to comment on the main point of the text. Subjects who did not comprehend the text properly tended to comment from an improper standpoint.

These results suggest that the proper understanding of the author’s ideas and the standpoint affect the reader’s contextualization of a text.

Key words: process of reading comprehension, reader’s original contextualization of text, reader’s standpoint

（ますだ　ひろこ　本学人文学部助教授　人間科学科）